

# 町史のひとこま

(第二十四回)

## 須恵国民学校の頃 ③

昭和二一年度卒業生に聞く

### 親父はこわかった

私たちの子供の頃は、今の同  
年令の子供たちとくらべると、  
責任のもたされ方がずいぶん  
違っていたと思います。

小学四年生の時からメシをた  
かされていたものもいますし、  
牛一頭の世話にまったく責任を  
もたされていたものです。毎日  
井戸から水を運んだり、つらい  
仕事も、その頃は当然のように  
思っていました。

親父といのがこわい存在で、  
もちろんめったに口を開くこと  
もありませんが、子供に話しか  
けるのは「しかりつける時か、  
仕事を言いつける時」でした。  
地域ごとに「子供たちの定会」  
が毎週土曜日にあつて約束ごと  
を決めたり申し合わせたりして  
いました。共同ぶろで老人の背

中を流してあげたりするのも小  
学生の役目。朝起き会などもあ  
りました。

正月行事の「ほっけんぎょう」  
は盛んに行なわれていましたが、  
他地区との燃やし合いなどとい  
うこともしていました。「ほっ  
けんぎょう」は小学三年生位で  
しなくなつた記憶もありますが、  
地区によってはずっとのちまで  
行なわれていたようです。

### 学校するよりカツコウせれ

勉強に熱を入れるよりも、一  
人前の人間としてモノの役に立  
つことが重視された時代で、「学  
校するよりカツコウせれ」と親  
に言われたものです。

生活の面でも、とても勉強だ  
けに熱中できるふんい気ではあ  
りませんでした。例えば「ろ  
うそく送電」というのがありま

した。これは戦時下で各家庭に  
送電される電圧が低くされ、電  
球がぼんやりと光っているのを  
「ろうそく送電」と言ったので  
した。そのうちさらにひどくなつ  
てフィラメントだけが光ってい  
るような状態になりました。  
「ろうそく送電」から「せんこ  
う送電」になつたわけですが、  
今考えると笑い話のようなもの  
です。

### スミぬり教科書

六年生の夏、ついに敗戦の日  
を迎えました(昭和二十年八月  
十五日)。

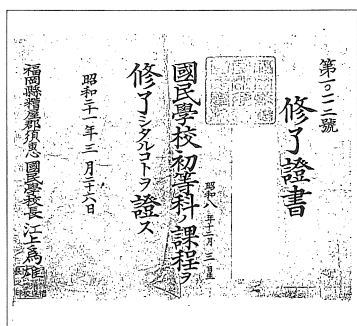
私たち小学生が、はじめて敗  
戦の現実と向き合つたのが「ス  
ミぬり教科書」の一件でした。

二学期になつても授業らしい  
授業もなく、体操と称して運動  
場で遊んでいました。九月末ご  
ろ、最初の授業は教科書にスミ  
をぬることでした。先生がここ  
とここを消しなさいと指示す  
るたびに、私たちは自分の手で教  
科書にスミをぬっていきまし  
た。字がスケて見えるところは、さ  
らに上からスミをぬり重ねまし

た。占領軍の意向で、戦時中使  
用していた教科書の内、占領政  
策と相いれないと考えられる所  
をスミで消して、授業に使えな  
いようにしたのでした。

修身・地理・日本歴史は十二  
月には授業停止の指令が出ます  
が、スミをぬつた教科書はこの  
三教科だけでなくほとんど全て  
の教科に及び、図画・工作の本  
からも日の丸や飛行機の絵を消  
したほどでした。

私たちは教科書を大切に扱  
うように教育されてきました。学  
校の行き帰りに雨になれば、自  
分はぬれても教科書だけはぬら  
さないように服でくるんだもの  
でした。それが先生の指示で教  
科書にスミをぬるのですからた  
いへんなショックでした。



先生との間に次のような会話  
が交されました。  
「先生、なぜスミをぬるのです  
か」  
「マッカーサーの命令だ。敗れ  
たのだから仕方がない」  
先生も涙をばらばらと流して  
いました。

昭和二十一年三月、私たちは  
国民学校初等科(六年)の課程  
を修了しました。修了証書と書  
かれた「卒業証書」を受けまし  
たが、わら半紙にガリ版ずりの  
ような、向こうがすけて見える  
ような紙でした。

戦時中に小学校生活を送つた  
私たちは修学旅行もなく、昭和  
五十五年二月十日・十一日、三  
十四年ぶりの「思い出修学旅行」  
を行ないました。(これで、この  
項を終わり、次回は「須恵の眼  
科医④」を掲載します)

なお、昭和二一年度卒業生の  
うち取材に協力していただいた  
のは次の方々です。紙上よりお  
礼申しあげます。  
印藤弥寿男・田原顕・中牟田  
昭壯・百田麻吉・吉松初子・渡  
辺絆(敬称略)

(町誌編集委員会事務局・石瀧)